様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６６０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００４００

研究課題名（和文）キプリングが描く「病い」の検証―大英帝国崩壊前後における不安の表象研究

研究課題名（英文）An Examination of Kipling's Depiction of "Illness" - A Study of Representations of Anxiety Before and After the Collapse of the British Empire

研究代表者
松本　和子（MATSUMOTO, Kazuko）

東京理科大学・教養教育研究院葛飾キャンパス教養部・教授

研究者番号：９０３８５５４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、従来のキプリング研究において十分に注目されてこなかった作中の「病い」に焦点を当て、キプリングが「病い」を頻繁に作中に登場させた理由を時代相を踏まえて考察することを目的に構想された。全執筆期を視野に入れた包括的研究スタイルによって得た考察は、帝国主義全盛期と重なる著作活動初期には外的要因による病いを多く描いていたキプリングが、帝国主義に影が差し大英帝国の衰退が始まる時期にあたる中期以降、精神的要因による病いを多く描くようになった変遷を裏付けとし、キプリングにとって「病い」を描く行為は公人として抑圧を強いられた大英帝国崩壊への不安の表出である可能性を強力に示唆するにいたった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　キプリングの作中に描かれた「病い」を通して帝国主義に対するキプリングの懐疑的な眼差しと帝国主義に下支えされた大英帝国崩壊の不安を明らかにした本研究は、1960年代半ばに機運が高まったキプリング再評価の重要なミッションである「帝国主義者」のレッテルをキプリングから剥がす動きを加速化し得る点に学術的意義がある。
　社会的意義としては、繁栄を誇るの当時のイギリスにおいて政治的・経済的基盤となる帝国主義の限界を察知しながらも帝国主義の牽引役としての役割を果たしたキプリング像を浮き彫りにしたことにより、時代と国家の強力な圧力に対峙した一知識人の事例を提示した点に意義が求められる。

研究成果の概要（英文）：This study was conceived to focus on "illness" in Kipling's works, which has not received sufficient attention in previous Kipling studies, and to examine the reasons for the frequent appearance of "illness" in Kipling's works in the light of the historical phase. The study, conducted in a comprehensive research style dealing with the entire writing period, supports the transition from Kipling's depiction of illness caused by external factors in the early period of his writing career, which coincided with the heyday of imperialism, to his frequent depiction of illness caused by psychological factors from the middle period, when imperialism and the British Empire were beginning to decline. This transition can be regarded as an indication that Kipling's works depict illness as an expression of his anxiety about the collapse of the British Empire, which he was forced to suppress as a public figure who people believe to be a strong supporter of imperialism.

研究分野：イギリス文学

キーワード：キプリング　帝国主義　病い

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

ポストコロニアル批評、フェミニズム批評、精神分析批評など多様な批評理論の台頭を受けて1960年代半ば以降に機運が高まったキプリング再評価は、イデオロギー的な批判に根差す批評から作品の多義性の探求へと方向を転じ、小説、詩、児童文学、プロパガンダ的作品といった複数のジャンルにおいて多角的な読みが仕掛けられ今日に至っている。本研究は、こうした動向を視野に入れ、1990年代以降活発化し、最先端のキプリング研究を牽引している、帝国主義に対するキプリングの不安を顕在化する試みの延長としてスタートした。

キプリングが自身の不安を巧妙に作品に隠蔽している可能性は先行研究の多くが示唆するものであり、研究開始当初の調査によって各キプリング研究者が独自の方法で隠蔽を暴いていることが確認された。そうした中、本研究では以下の三つの理由から「病い」に着目することで隠蔽を暴こうと考えた。（１）男性性弱体化への恐れと不安から心身に不調をきたし、アイデンティティ・クライシスに陥る男性登場人物に焦点を当てた科研費研究（2013～2014年度）の過程で、「病い」がキプリング作品を読み解くひとつのキーワードになり得る手ごたえを得た。（２）第一次世界大戦の不安を背景に多数の登場人物が癌、結核、神経症、シェルショックなどの病いに苛まれる後期作品を対象とした科研費研究（2016～2017年度）は、前述（１）で得た手ごたえをさらに強める結果を生み、「病い」が不安の表象であることの検証を目指す研究方針が定まった。（３）研究開始期はCOVID-19が猛威を振るっている時期と重なっており、COVID-19の影響下で文学と「病い」の関連性が各方面でクローズアップされている状況は、キプリング文学における「病い」という新領域開拓の挑戦に追い風として作用すると判断した。

２．研究の目的

キプリングは『ジャングル・ブック』や『少年キム』といった冒険を前面に出した物語があまりにも有名なため、健康に恵まれた活発なキャラクター（主として少年）が縦横無尽の活躍をする物語の作者というイメージが強い。したがって、キプリングの作品にきわめて多数の「病い」が登場することはほとんど知られていない。本研究は、この事実を確認、提示した上で、何がキプリングを病いの描写へと駆り立てたのかを時代相を踏まえて解明することを目的としたものである。

研究の基盤となる全体構想は、大英帝国崩壊前後にイギリス社会に蔓延した先行き不透明な状況を背景とする不安が、同時期の小説にどのように表象されているかの検証にあり、本研究においてはキプリングが描く病いに不安の表象としての意味付けを行うことを狙っている。その際に念頭に置くのは（１）帝国主義とキプリング文学をどう結び付け、どう切り離すか（２）「文学と病い」のコンテクストにキプリングの小説を置くことによって何が見えてくるのかという二つの学術的な問いである。再評価以降のキプリング研究全体の根幹となる問いでもある（１）に対して、本研究は従来の研究では十分に議論されていない病いを切り口に作品世界に踏み込み、答えを導くことを目指す。具体的には、国民の健康に下支えされた帝国主義の発展を脅かす「病い」と、病いを得た登場人物の双方を断罪せずに、むしろ理解や共感を感じさせる筆致で描いている事実を考察の対象とする。（２）は、キプリングの小説が「文学と病い」のコンテクストに置かれたことがほとんどない現状に鑑みて立てた挑戦的な問いであり、〈キプリングの小説に隠蔽されたと思しき「不安」の顕在化〉、〈作品解釈上の斬新な視点の獲得〉、〈新たなキプリング像の提示〉の三点に対する答えを模索する。

３．研究の方法

研究初年度は、作品から網羅的に抽出した病いを時系列と症例別に分類・整理することで、キプリングの小説における病いが俯瞰可能な見取り図を作成すると共に、キプリング自身の病いに関する伝記的調査を行う。二年目には初期作品を対象にし、三年目には後期作品を対象にして病いの検証に注力する。詳細は次の通り。

（１）2021年度

テーマ：〈病いの俯瞰図〉の作成、キプリングの病いに係る伝記的調査

目標：１．可能な限り多くの小説を対象に据え、病いの見取り図を作成する

２．伝記資料を通じてキプリングが恒常的に病いに苦しんでいたことと、医師との交流を通じて当時の医学言説に親しんでいたことを実証する

方法：Kiplking Society のサイトを活用すると同時に伝記的先行研究、書簡集、日記などを利用する

（２）2022年度

テーマ：植民地（主としてインド）を舞台とする初期作品に登場する病いの検証・考察

目標：１．当初はインドの風土描写として扱われていた日射病、コレラ、不眠などの病いが、植民地経営の行き詰まりに伴い、罹患者である登場人物の心に巣食う不安を表象する機能をもつようになった病いの意味付けの変遷を考察する

２．論考をまとめて発表する

方法：活動初期の特徴が鮮明なデビュー作『高原平話集』と、初期の終わりに近い 1904 年頃までの小説を時代相を念頭に比較し、病いの扱いをめぐる変化を論じる。同時代にマレー諸島の colonial diseases を描いたコンラッドを考察対象に加え、議論を活性化する。

（３）2023 年度

テーマ：後期作品を対象とする病いの検証・考察と研究総括

目標：１．キプリングの病いに対する関心が癌と精神疾患に集中し始めた時期と、イギリス国内に蔓延する不安が頂点に達した帝国終焉期が合致することを提示し、相関関係を解明する。

２．研究総括としての論考をまとめて発表する

方法：肉体の病いである癌による身体の崩壊と、心の病いである精神疾患による心の崩壊がどちらも再生不能として描かれる晩年期の作品を中心に、帝国主義の破綻という病いに陥った大英帝国に対するキプリングの不安を詳細なテイストの読みから表面化する

４．研究成果

〔研究の主な成果〕

各年度の主な成果は次の通り

（１）2021 年度

キプリングの小説における病いの俯瞰が可能な〈病いの見取り図〉の作成については、Kipling Society のウェブサイトを活用し、作中に描かれる病いの抽出を行った。具体的には、Kipling Society の Readers’Guide から Themes in Kipling’s Works にアクセスし、Thems からは [Healing] と [Stress] を、Work からは [Medicine] をそれぞれ選択肢、単独レファレンスとクロスレファレンスの二つの方法で作品を検索した。あまりにもヒットする件数が多かったため、全作品を対象にするのは断念せざるを得なかったが見取り図的なものは仕上がった。見取り図から読み取れた点は、①キプリングが描く病いは、外的要因（特に気象、風土）によるもの（日射病、熱射病、コレラなどの熱帯系伝染病など）から内的要因（不安、恐怖、ストレスなど）によるもの（睡眠障害、パニック障害、シェルショックなど）へと変質していった②病いに対するキプリング関心は著作活動開始直後から最晩年に至るまで持続していた③中期から後期にかけての作品においては、若さの盛りを過ぎた中年女性の病いが描かれる事例が散見する④第一次世界大戦を境にそれまで描かれることがほとんどなかったトラウマを原因とする病いが描かれ始めた、の四点におおよそ集約される。

キプリング自身の病いに係る伝記的調査については、キプリングが慢性的に体調不良であったことを突き止めるに至った。特に娘の病死と息子の戦死を引き金とする不調は死に対する怯えをキプリングに与えるものであったことが私信から明らかになった。晩年の小説に癌が登場する割合が増えているが、これはキプリングが自身の癌を疑っていた時期と重なる。現在とは異なり、当時の医学水準では癌＝死のイメージが強く、晩年の作品には暗いトーンのものが多い理由の一端とみなせる。

当該年度の成果発表としては、キプリング協会全国大会第２２回において口頭発表(「“The Man Who Would Be King” から読み解くキプリングとコンラッドの距離」)を行った。初期作品のひとつである“The Man Who Would Be King” を題材に、主人公の obsession を病いのひとつのあらわれと見立て、同時期に同じく obsession に憑りつかれた登場人物を複数描いたコンラッドを議論に取り込み、自己破滅、自己破壊へと導く病いとしての obsession の恐ろしさと、その恐ろしさに共に興味をもった両作家の共通点を提示した。

（２）2022 年度

主としてインドを舞台とする初期作品に登場する病いに着目し、検証と考察を加えた。作家としてのデビュー作にあたる『高原平話集』の前に著された作品と『高原平話集』に収録された作品とを比較すると、前者に関してはイギリスとは著しく異なるインドの風物を作中に取り込み、いわゆる異国情緒を作品に添える意図の反映として、病いが描かれていた可能性が見出せた。「恐ろしい夜の街」はその一例で、夜になってもおさまることのない暑さに打ちのめされ、地べたのいたるところに寝転がるハンセン氏病の患者を含む大勢の人々は、繰り返し「死体」になぞらえられながら、ヒンズー教寺院の周りの一風景として描かれており、インドの過酷な暑さを読者に伝える働きをしている。当時のキプリングが注目される以前の駆け出し作家であることを考えると、インドの風物を積極的に描き出し、異国趣味を作品に盛り込むことによって読者として想定されているイギリス人の興味を惹く狙いが背後にあったと考えられる。したがってごく初期のキプリングにとって「病い」は異国情緒を醸し出す小道具的な扱いだったと位置づけられる。

その後、数年を経て著された『高原平話集』に目を転じると「病い」について二つの点で大きな変化が生じたことに気付く。ひとつはキプリングが描く「病い」そのものであり、もう一つはその位置づけである。前者に関しては、日射病や暑さによる不眠など身体的な「病い」は影を潜め、精神のバランスを崩し狂気に至る精神的な「病い」がクローズアップされている点が挙げられる。「青春の盛りに」、「落ちこぼれ」、「兵卒オーセリスの狂気」などが精神的病いを前面に出した作品の代表格と考えられ、特に「青春の盛りに」と「落ちこぼれ」に至っては病んだ主人公の自殺で幕を下ろしている。「病い」の位置づけについては、異国情緒を醸し出す小道具的扱い

からテーマに直接かかわる重要性をもった位置づけに変化したことが読み取れる。たとえばラホールのアヘン窟が登場する「百の悲しみの門」におけるアヘン中毒の主人公は、インドでは珍しくないアヘン中毒者をインドらしさを強調するために描かれているのではなく、アヘンに蝕まれた精神の腐敗を強調するために描かれていると考えられ、小道具以上の機能を果たしていることは明白と言える。

当該年度の成果発表としては、前年度のキプリング協会全国大会第２２回で行った口頭発表の一部を活用し、初期のキプリング像に迫る目的で「『王になろうとした男』における初期のキプリング像」を東京理科大学教養教育研究院紀要に査読付き論文の区分で投稿した。

（３）2023 年度

中期・後期の作品を主な研究対象に据え、特に 1904 年の『ミセス・バサースト』以降の後期作品に注力して研究を行った。当該年度の大きな成果のひとつは、女性キャラクターをキーパソンとした作品が中期以降増え始め、そうした女性が精神的「病い」を発症している、あるいは発症する事例が多いことへの気付きに求められる。この事実の背景にあるのは、諸作品の執筆時期から計算すると、行き詰まりと破綻、大英帝国の存在を脅かし続けるドイツの台頭、そして第一次世界大戦といったイギリスを社会不安に陥れるのに十分な力を持つ社会状況の変化とみなせる。敵国ドイツの兵隊と信じて疑わない瀕死の青年をさんざんいたぶった挙句に見殺しにする主人公メアリの物語『メアリ・ポストゲイト』は、第一次世界大戦期のイギリスの苦境下に著された短編の一つであり、メアリのおぞましくもヒステリックな振る舞いから感じ取れる神経症的症状を同時期のイギリスに重ねることにはかなりの妥当性があると判断される。

第一次世界大戦に関連し、「病い」としてのシェルショックに考察を加えたこともまた成果として挙げられる。シェルショックについては『塹壕のマドンナ』の主人公がまさにその患者として描かれており、塹壕戦での過酷な戦争体験によって精神を病んだ青年に着目して作品を精読することにより、自身が戦争体験者であるキプリングがこの「病い」に深い共感を寄せていること、また、結末部分から察するに、シェルショックの完治に懐疑的であることが理解された。戦争が個人の心に残した傷は国家としてのイギリスに残した傷でもあり、深手を負ったイギリスが再び大英帝国の勢いを盛り返すことにキプリングがほとんど絶望していたことが伺われる。

絶望という点では、晩年の復讐譚『損なわれた青』」の検証を通じて、キプリングが癌を不治の病いとして恐れていたことが、私信や日記的なメモの研究と合わせて確認されたことも成果に数えられる。『損なわれた青春』は三角関係のもつれに端を発する救いようのない復讐譚であるが結局、復讐は少なくとも復讐者が想定して通りには果たされず、その原因の一端に癌が係る点に特徴がある。当時の医学水準に照らせば確かに癌は効果的治療が確立されておらず、死と距離の近い病いであったことは間違いがない。今回の調査により、キプリングが癌を描き出した時期と本人の体調不良期、特に癌の症状とみなせなくもない体調不良期がほぼ重なっており、死への怯え、不安が作品に反映された確率はかなり高いと思われる。ちなみに、同時期のイギリスはかつての栄光は消え失せ、次なる対戦への不安が押し寄せてくる頃であり、キプリング自身の健康に根差した不安とイギリス国家行く末を案じる不安が、晩年の多くの作品にはダブルで投影されていると考えられる。

具体的な成果としては、科研費研究期間中の成果全体を扱うとりまとめが進められており、論文・口頭発表を 2025 年度以降に活発に行う計画を立てている。

〔国内外における位置づけとインパクト〕

国内外共に、成果発表からまだ時間がそれほどたっていないうえに、小規模な成果発表に留まってしまったことを理由に、位置づけ・インパクト共に大きな手ごたえを得るには至っていない。今後、意欲的に成果を国内外に発信し、研究領域において確固たる位置づけと、大きなインパクトを与えられるよう引き続き研究を推進していく。

〔今後の展望〕

国内においては、少なくともキプリング協会においては「病い」を前面に出した研究が活性化する兆しはまだみられないので、今回の科研費研究をもとに、キプリングと「病い」を結び付けることの意義を発信し、たとえば〈帝国主義時代に活躍した作家における「病い」の扱い〉〈「文学と病い」のコンテクストにキプリング作品をはじめとした帝国主義時代の小説を置くことによって何が見えてくるか〉などの問いを深めることでキプリング研究に新機軸を打ち立てたい。

〔予期していなかった新たな知見〕

科研費研究遂行中に複数の新たな研究に向けた着想を得ることができたが、知見と言い得るものとしては、〈作品に色濃く反映されているキプリングの「老い」に対する関心の強さと否定的な姿勢〉が挙げられる。今回の研究の一つの特徴は包括的な研究スタイルに求められ、結果的に駆け出し作家時代の作品の精読に時間をかけることができた。その過程で、２０歳に満たない時代の作品においてすでに老いが扱われていることに気付いた。たとえば、酔いが回ったイギリス人の青年が、夢とも現実ともつかない状況で老いさらばえた自分による訪問を受けるという「ダンカン・パレネスの夢」の執筆時、キプリングはわずか１９歳であった。分身という角度からも興味深いこの短編に描かれる老いた自分は醜悪とも言える雰囲気をたたえ、決して読者に好印象を与えるような人物描写はなされていない。中・後期の作品においては「病い」を得てし

まう中年女性登場人物が複数登場しているが、彼女たちの多くは若さの盛りを過ぎたことがさまざまな表現、あるいは時には辛辣な表現で記されており、キプリングが老いに否定的なことが伺われる。キプリングはファンタジー作品も多数残しているが、そこに描かれている妖精たちのことを「老いを拒否している生物」「老いとは無縁の生物」と位置づけ、「老い」に対するキプリングの姿勢を考察するならば、ファンタジー系作品の読みに新たな解釈を加えることが可能なのではないかと考える。「病い」の研究を発端としてファンタジー系作品に対する学術的関心が芽生えるとは予期しておらず、時間も限られていたことから今回の研究においてはファンタジーはまったく扱えなかったが、機会を見つけてファンタジーも射程に入れた研究を発展させていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 松本和子	４．巻 1
２．論文標題 「王になろうとした男」における初期のキプリング像	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東京理科大学教養教育研究院紀要	６．最初と最後の頁 112-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 松本和子
２．発表標題 "The Man Who Would Be King"から読み解くキプリングとコンラッドの距離
３．学会等名 キプリング協会全国大会第２２回
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関